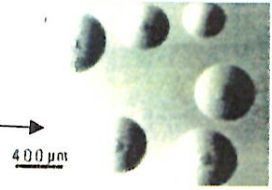


【マイコプラズマ性肺炎対策】



はじめに

前回マイコプラズマについてまとめましたが、マイコプラズマ性肺炎対策について詳しく考えていこうと思います。

マイコプラズマ性肺炎について復習

多頭飼育されている若齢哺育牛から育成期の子牛に多発し、ウイルス・細菌等との混合感染や二次感染で肺炎を悪化させます。

感染経路は、感染動物との接触による感染が多く、飛沫を吸入することによる空気感染もあります。

よって、対策としては感染経路の遮断や抗生物質の投与、他の肺炎原因菌予防等があります。

ワクチン

マイコプラズマのワクチンは残念ながら存在しませんが、肺炎の原因となる、ウイルスや細菌のワクチンは存在します。

肺炎は先ほども書きましたが、ウイルスや細菌との混合感染も多いです。マイコプラズマは一次感染としても、ウイルスが感染した肺への二次感染としてもなり得るのです。



ウイルスや細菌の検査も実施し、マイコプラズマだけの感染でない農場は、ワクチンの実施も考えましょう。

消毒剤

感染経路の遮断のための、マイコプラズマをやっつけることができる消毒剤についてです。前回話しましたが、マイコプラズマは他の細菌と異なり、細胞壁というバリアをもたないため、一般細菌よりも消毒に弱いということです。

よって、消毒剤はパコマやアルコール、消石灰、塩素等、基本的に有効です。消毒による予防をまず行いましょう。

感染経路を遮断するには？

衛生的な環境の維持が必要となります。

複数個体の使用する餌槽や水槽、哺乳ロボットの乳首や壁が感染源としてあげられ、日々の清掃や消毒が必要となります。できる範囲で行うのが良いでしょう。特に哺乳ロボットの乳首や水槽は毎日清掃するのが望ましいです。

抗生物質による治療

前回、効く抗生物質としてドラクシンやOTC、バイトリル等を紹介しました。特にドラクシンは効果持続時間が長い(マイコプラズマは少なくとも9日間)ので、予防的な使用方法もできます。

また、飼料やミルクに添加できる抗生物質として、CTC散やOTC散、アイブロシン等があるので、獣医師の指導の下、使用も考えましょう。

さいごに

マイコプラズマ感染牛を未感染牛の群に入れると、24時間以内に未感染であった牛の鼻からマイコプラズマが検出され、7日以内でその群のほとんどの牛から検出されることが研究で明らかになっております。

既に蔓延している群であれば、全頭に抗生物質を投与し、その群の消毒を徹底して行い、定期的に検査を行ってマイコプラズマがフリーになるまで対策を続けるほかないと思います。

そもそも肺炎になりにくい環境作りや初乳による免疫力等も必要になるかとは思いますが、ご参考になれば幸いです。ありがとうございました。

小方可奈江



Total Herd Management Service